

第2回 生駒市史編さん委員会議記録（要旨）

- 1 日時 令和3年10月29日（金）10：00～12：10
- 2 場所 生駒市役所403・404会議室
- 3 出席者（敬称略）
 - （参加者）谷山正道、吉川真司、天野忠幸、高木博志、神田雅章、山本昇、原井葉子、八重史子
 - （関係者）吉田栄治郎、浦西勉
 - （事務局）西野図書館長、錦図書館課課長、清水生涯学習課長、伊田市史編さん係員、小野市史編さん係員
- 4 会議の公開・非公開 公開
- 5 傍聴者 なし
- 6 議事内容
 - ・地理・文学分野の執筆者追加報告
 - （1）各分科会報告
 - <古代史分科会報告>
 - ・分科会メンバーの担当分野の説明
 - ・考古資料が非常に多く、遺物・図面などの所在確認やデータ整理が必要。10月8日の遺物確認調査で概要は掴めたため、檀考研・奈文研のデータと合わせてどう活用するか議論し、市内の各地の遺跡がどう分布しているか共通認識を得ることができた。
 - ・市史本編はあくまで歴史書であるので、考古と文献を分けることはせず両方のデータをうまくつなぎ合わせながら生駒の古代史像を作り上げる。
 - ・史料集には主な遺跡でどのような遺構・遺物が出ているかなど、基本的な情報を盛り込む必要があるため、文献だけでなく考古の内容も加える。
 - ・考古資料は整理・報告ができていない部分があるため市史とは別の資料集成という形で発表していく。（埋蔵文化財資料集成）
 - ・古代と中世の時代の区切りは摂関期から院政期への転換期の11世紀後半。
 - <中世史分科会報告>
 - ・分科会メンバーの担当分野の説明
 - ・大学院生らに大学図書館等で刊本調査を実施し、カード化する作業を進行中。
 - ・寺社の取扱いについては、中世だけの枠組みで考えるのは難しいため、文化財編として地元で密着した寺社を一括し、時代がまたがるものは寺院史としてまとめて取り扱うとインパクトがあるという意見あり。
 - ・石造物や寺院遺跡などを中世でまとめるのか、文化財パートや寺社だけまとめるパートに入れ込んだほうが良いのではないかという意見あり。
 - ・文献を調べると、生駒山地全体の山岳寺院・山岳信仰の存在が出てくる。大和側から見た生駒山だけでなく、大阪平野側から見た生駒山は信仰の蓄積があるので、市域に限らず山そのもの

を山岳寺院遺跡や宗教信仰の地として取り上げるべきではないかという意見あり。

<近世史分科会報告>

- ・分科会メンバーの担当分野の説明
- ・村落レベルの寺社の取扱いについて、近世の資料では当時の状況が掴みにくいが、地元の住民は知りたいと思っているため、どこでどうまとめるかを考えないといけない。

<近現代史分科会報告>

- ・分科会メンバーの担当分野の説明
- ・前回から地理メンバーが3名追加。市制施行以降を担当してもらい、さらに行政OBにも協力をお願いしたい。
- ・生駒は大軌の存在が非常に大きく、生産力の低かった北生駒が急にまちになり、近代の先端になってくるところが大きな部分であり、どう扱うか議論をしている。
- ・近現代は地域に残っている資料が多く、新聞記事の調査が重要なため、大和タイムス・奈良新聞・大阪朝日新聞の生駒関係の記事を抜き出す作業をしている。大きく時間がかかるため、大学院生のアルバイトにも携わってもらっている。
- ・基本方針で「子どもにも読めるように」という記述があったが、市民が読むものと子どもが読むものでは両立が難しい。他市の成功例として、市民向けの市史を発刊後に子ども向け・教育用に図版を多く散りばめた形で刊行している自治体もあるので紹介する。
- ・市史と「子どもにも読めるもの」との両立は難しいため、市史の刊行後わかりやすい形にまとめ直して教育用として刊行する形で進めるのでどうか。

<文化遺産・自然分科会報告>

- ・分科会メンバーの担当分野の説明
- ・民俗分野でボリュームが少ないとの意見が出た。
- ・寺社仏閣の取扱いについては、建造物では宗教法人の登録に関係なく小さい祠や無住のところも調査しているため、寺社の解説でどの程度取り上げ、どこで線を引くのが課題となる。寺社で紹介されながら文化遺産で出てこないのは整合性がとれないといった懸念もあった。当初、近世で寺社部分を担当すると聞いていたので、文化財的な見方で取り扱うと創建時に比重がいくと予想される。近世の人が執筆すると、近世の歴史の中で重複するのではないかなどの懸念があると話題になった。

(2) 本編の構成について意見聴取・報告

<民俗分野のページ増加について>

- ・民俗分野は対象となる衣食住や暮らし、民間信仰など含めて民俗の項目を一通り叙述しないとイケないというのが担当者の総意であり、これまでの調査結果とこれから4年間の調査を踏まえると、当初の100ページでは到底足りず概ね300ページは必要。

- ・生駒市の一般の民衆の生活に残る伝承的、観光的、伝説、信仰、年中行事、芸能、祭礼、伝承技術などの起源・発達を考証しながら叙述して生駒市の民俗をまとめたい。これまでの報告書も含めて、今回は生駒山関係の民間信仰も重要であるので、民俗調査や、かつての水利慣行の集中的な調査、昔話や伝説・民謡の掘り起こしも考えている。
- ・民俗伝承について、この4年でどれだけ聞けるかわからないが、100歳ぐらいの方から1950年代の住民から話を聞き取り、記録していきたい。
- ・民俗以外の分野はオーダー次第でページ数の調整が可能。

⇒ボリュームを抑えられるところは抑えるよう文化遺産分科会内で調整してもらい、最終どのぐらいの予算になるかでページ数を調整していく。（事務局）

<その他ページ数について>

- ・近現代史では地理のメンバーが加わったことにより、第3巻も現状に関する部分のボリュームが増える見込みである。
- ⇒分科会内でどのぐらいのボリュームが必要か検討を行う。
- ・市としては市制施行からの50年間の内容をしっかりまとめていきたいという思いから市史編さんは始まっているので、ページ数にこだわらずに進めてほしい。

<寺院・神社史について>

(意見)

- ・寺社の取扱いは、時代を超えて1つのまとまりとする考え方とそれぞれの時代ごとにまとめる考え方がある。1つのまとまりとすると第4巻に入り込み、全体のバランスがおかしくなる。各時代で扱う場合、時代によっては資料が残っておらず叙述できない寺社が出てくる。一案だが、市史で全ての寺社を取り扱う場合、各時代で資料が残っている寺社はその時代で取り扱い、漏れ落ちる寺社は近代はじめに行われた寺院調査や神社調査を基に、近代で触れられるのではないか。
- ・市史はあくまで地域史であるので、各時代でどんな移り変わりがあったかを叙述するのが基本だと考える。
- ・全体のバランスの中でそれぞれ触れたら良い。時代の中で宗教の事項に触れながら、建造物や文化財などに特化したものがあってもよいのではないか。
- ・各時代から漏れ落ちた寺社は近代に限らずどこかで拾えば良い。どこで取り上げても前の時代・次の時代と重なるように書かないといけない。
- ・文化遺産分科会の議事録に「リスト的なものとして載せる」とあるように、他の自治体史を見ていると、各村の寺社は必ず全て載っている。所有している文化財や現状のデータに、簡単でもいいので歴史が書かれていればインデックスとしても使える。
- ・第4巻はすでにボリュームが大きいのが、寺社の記述が入る余地はあるのか。第3巻の近代のところで収めると、ページ数の問題が解消できるのではないか。
- ・近現代を取り扱う第3巻では地理のページが足りないということだったので、寺社を入れると

さらにページ数が増えていく。他市では文化遺産の一部や本編の寺社編として出しているところがあり、重さの問題はあるが市民が持ち歩けるように、少ない行数であっても全ての寺社に触れるようにしている。今は第4巻だけ800ページでアンバランスなので、2分冊にして寺社を取り扱うのが良いのでは。

(寺社の取扱いまとめ)

- ・それぞれの時代で扱うべきところは扱う。
- ・各時代から漏れ落ちる寺社は村落レベルのものも含めて、第4巻の文化遺産・自然編で沿革や現状を書く。
- ・民俗分野のボリューム増加も踏まえて、第4巻の文化遺産・自然編は上下巻に分けて刊行する。
- ・寺社の沿革や概要の執筆担当は吉田氏。また融通念仏信仰、浄土真宗・真言律宗、東大寺関係などは近世偏の「信仰と宗教」で書く予定。

<その他>

- ・資料3について、第1巻の「1」の表題が分科会のときから変わっているので当初の「生駒古代史の舞台-山と川と道-」に戻してほしい。古代の人々の暮らしなど、歴史地理的なことは歴史を叙述するのに前提として必要であるが、自然地理は古代史で触れることはできないため、気候・地質・地形をどこで扱うかといった課題が残る。
- ⇒他市での事例も踏まえ、第1巻の第1章の前に古代史とは別で「自然地理編」のパートを設ける。

(3) 人権問題に関する事項の取扱いについて

(意見)

- ・市史編さん事業に先立ち、地元の方々に被差別集落の歴史について取り扱うことを説明。人権に関する事項が出てくる中世と近代の間で、どう取り扱うか詰めていく必要がある。
- ・被差別集落の歴史をどこでどのような形で書くか、地名の表記などの検討課題がある。時代を超えて「被差別集落」として独立した形でまとめる方法か、各時代で取り上げる方法のどちらかが考えられる。
- ・風俗誌はおもしろい史料であると同時に難しい史料でもあるため、他市では取り扱わなかった。市として発刊するので、学問的な面だけでは議論できない。直接的な表現などは、一部を省略して処理するのがいいのではないか。
- ・他市でも風俗誌が載っているものがあるが、すべてを載せるのではなく項目を抜粋して掲載しているケースがある。

(人権問題に関する事項の取扱いまとめ)

- ・該当する史料について適宜判断する。

- ・本編では各時代で触れる形とする。
- ・近現代史分科会で被差別集落について誰が担当するか年度内に検討してもらう。
- ・古代史で取り扱う予定の絵図に載っている小字名の表記については、具体的に出てきた際に判断していく。

(4) 書籍の規格について

- ・分科会から史料集に図版や写真を用いたいといった話が出ていたこともあり、B5サイズだと重さの問題はあるが情報がたくさん掲載できると考えていた。また本編は、見開きや3~4ページごとに写真・図を入れるといった想定である。(事務局)
- ・史料集はB5サイズを考えていたが、かなり大きく重たい印象もある。
- ・歴史学で学術書を作るときはB5は使わない。やはり読みにくい。
- ・A5サイズであれば2段組みではなく1段組みが多い。
- ・自分で読むにはA5サイズが良いが、最近の流行で3~4ページごとに写真を入れていくのであればA5サイズだと何が載っているかわからないかもしれない。
- ・分野によってどのサイズが良いか異なるのでは。
- ・史料の収容量も含めて、史料集はB5サイズのソフトカバーが良い。

⇒史料集はB5サイズ。本編は意見が割れているためもう少し期間を置いて決める。

(5) その他

<令和4年度以降の事業案について>

- ・執筆者の先生方に数年間生駒について考えていただける貴重な機会のため、調査や研究の成果を市民の皆様に還元する事業を毎年度開催していきたい。(事務局)
- ・講演会と連続講座を考えており、今年度は近現代史分科会の先生方に講師を務めてもらい講演会を実施する。講演会は今後も毎年度、各分科会から2~3名程度出してもらい、持ち回りで開催したい。連続講座は50名以下の規模で、年度ごとに対象地区を北・中・南に分けて自然や歴史の講座・フィールドワーク・各論の講座を想定。先生方からもアイデアをいただきたい。出なければ事務局で計画を作成し、依頼する予定。(事務局)

⇒各時代でできることがあれば事務局へ知らせる。

<その他>

- ・添付している史料集の担当割には、発刊年度・担当者が書いてあるので各分科会でよく確認されたい。修正があれば事務局へ連絡。

以上